

レオン・ワルラスは父親の経済思想をどのように受け継いだか
——フランス民法典とワルラス父子の経済思想——

安藤金男（名古屋市立大学・名）

はじめに——報告の主題

限界革命の担い手の一人であり一般均衡理論の創始者レオン・ワルラス（以下、レオンと略記）は、父親オーギュスト・ワルラス（以下、オーギュストと略記）の強い勧めに従って経済学の研究を始めていた。そして、レオンは父親の強い勧めに従ったばかりでなく、父親の経済思想を彼の経済学体系の基本に据えたのである。したがって、彼の「純粋経済学」を理解する場合にも、父親の経済思想の全体像を把握しておく必要がある。

そこで、本報告においては、Ⅰにおいて、オーギュストの経済思想の全体像を彼の『社会的富の理論—経済学の基本原理の要約—』（1849）に読み取り、Ⅱにおいて、レオンがこの父親の経済思想をどのように継承し、純粋経済学を始めとする彼の経済学体系の建設に取り入れたかを『純粋経済学要論』初版出版（1874-1877）までの時期に限定して検討する。

そして最後のⅢにおいて、ワルラス父子の経済学説がフランス革命の偉大な所産であり、近代私法の典型でもある「フランス民法典」とどのような関連があるかを考えてみたい。

Ⅰ オーギュスト・ワルラスの経済思想

オーギュストの経済思想—「経済学の基本原理」—は「稀少性」と「耐久性」という2つの概念を中心に構築されている。

（Ⅰ-1）「稀少性」による富一般の分類

人間は感覚的存在として、生涯にわたり1) 肉体的、2) 知的、3) 道徳的な「欲求」に支配されている。この3つの欲求の支配に従うことに対して、人間は「人格」(person)として神の摂理により自然界から豊穡で多様な諸力と素材、すなわち「もの」(chose)を与えられている。

「人格」の「もの」に対する支配をめぐる、「人格」相互間に権利・義務の法的関係が成立する。

あらゆる有用な「もの」、すなわち「富一般」は我々の主観的な欲求を満足させるものとして「効用」をもつ。この「富一般」は、①量に制限のない富と②量に制限があり人間全体の欲求をすべては満たし得ない富に分類することができる。前者は「稀少性」のない富であり、後者は「稀少性」のある富である。この分類はローマ法以来の伝統である。

空気や太陽エネルギーのような「稀少性」のない富はi) 占有（合法的な占有が所有）、ii) 交換、iii) 生産の対象とはならないが、「稀少性」のある「富」は、i) 占有の対象となり、さらに「稀少性」を克服するためにii) 交換の対象となり、iii) 生産による「変形」と「増加」の対象となる。

交換は「もの」をめぐる諸「人格」相互間の権利・義務関係としての社会を内包しているので、富一般のうち後者②は「社会的富」と名付けられる。「社会的富」は交換の対象となり「交換価

値」を与えられるので「経済学」の研究対象となり、同時に占有の対象となるので「所有の理論」の対象となる。「経済学」と「所有の理論」は「社会的富」という共通の対象を研究する学問であるから、相互に補完的でなければならない。

(I-2) 「耐久性」による「社会的富」の分類

富の存在量における制限の有無によって、「効用」をもつ「富一般」から「効用」と「交換価値」の両方をもつ「社会的富」が区別された。後者の「社会的富」は更に「耐久性」の程度の大小によって「資本」と「収入」に分類される。

1回の使用によってすべて消費されてしまう非耐久的な「社会的富」は「収入」であり、贈与、交換、売買、「消費貸借」の対象となる。他方、1回の使用によってすべて消費されてしまわないで、複数回の使用に耐える耐久的な「社会的富」は「資本」である。これは「有償」の「使用貸借」あるいは「賃貸借」の対象となることができる。

量における制限、耐久性における制限、この2重の制限に経済学のすべてが結びついている。これがオーギュストの経済学的認識の核心をなすものである。

(I-3) 貴金属の2つの役割—価値尺度機能と貨幣機能—

「社会的富」の「効用」は量として測定することはできないが、「交換価値」はその大きさを「価格」において計量することができる。ただし、「交換価値」の大きさは、生産技術の革新と文明化による欲求の多様化、高度化によって絶えざる動揺にさらされている。一定不変の「交換価値」をもつ「社会的富」は存在しない。

「社会的富」は、その絶えず変動する「交換価値」自体を直接に外部に表示することはできない。そこで、価値変動が比較的安定していて、かつ誰からも普遍的有用性、したがって普遍的価値性格を承認されている「社会的富」である貴金属を価値尺度財（「比較標識」）として選び、「相対的価値」である「交換価値」の大きさを「価格」として「相対的に」表示するのである。「社会的富」の1つである「貴金属」が価値尺度機能を果たす。

ところで、「社会的富」は「効用」と「交換価値」という2面性をもつ。社会的分業の進展とともに、効用をもたらす富の「消費」は多様化され、交換価値の「占有」は一様化される。言い換えれば、各人は多様なものを消費できるようになるとともに、通常ただ1種類の財産しか占有していないようになる。

彼らは自分が占有するものの消費にとどまることもできるが、他者の占有物との交換によって「効用」（主観的満足）をより大きくすることができれば交換を望むであろう。ここから、より大きな「効用」を獲得するために「交換の必要性」が生まれる。ただし、オーギュストは、交換による総効用の増大を考えたが、息子レオンのように、交換者による総効用の最大化という問題にまでは到達することができなかった。

「社会的富」の交換が物々交換として頻繁に行われなければならないとしたら、交換当事者間における欲望の一致の困難などの理由により、交換そのものが不可能になる場合が生じる。ここから、交換の一般的仲介物として「貨幣」が必要になってくる。「交換手段の必要性」が生まれてくるのである。貴金属がその自然的特性により「貨幣」の機能を担う。

(I-4) 資本と収入、ならびに、各収入の特殊法則

「富一般」のうち「社会的富」は、その耐久性の程度の大小により「資本」と「収入」に分類された。資本と収入の具体例としてオーギュストは、リンゴの樹とリンゴ、雌牛と牛乳などを挙げている。これは、ローマ法以来の伝統的な法律概念である「元物」と「果実」の区別に照応している。また、「資本」と「収入」の区別は医者と患者の治療や弁護士と弁論のように、人間とその活動に対しても適用される。これは、フランス民法典が雇用や請負の契約を物の賃貸借と同様に捉えていたローマ法以来の伝統を継受しているからだ。

さて、資本には①「土地」ならびに人間の②「個人的能力」という本源的な自然的資本と、人間が労働によって自然素材を加工して作った派生的な③「人為的資本」がある。

それらの資本（元物）から生まれる収入（果実）が、資本の生産的用役、すなわち資本の一定時間当たりの非物質的な生産機能である土地用役、労働用役、資本用役である。

資本も収入も社会的富であるから、それらは「交換価値」したがって「価格」をもつ。

このうち、資本からの収入の価格、すなわち資本用役価格（地代、賃金、利子）は次の3つの要素から構成される。①資本の使用によって生まれる用役自体の価格、すなわち「純収入」、②資本の消耗後に資本を置換するための費用である「減価償却費」、③資本の偶然な損失に備える「保険料」である。かくして、次式が成立する。

$$\text{収入の価格} = \text{純収入} + \text{減価償却費} + \text{保険料}$$

息子のレオンは、収入の価格＝租収入；純収入＝租収入－（減価償却費＋保険料）とする。

資本の収入と同様に、資本自体も価格をもつが、それでは資本の価格と収入の価格の間にはどのような関係が成立しているか。オーギュストは人口が増加しつつあり、技術進歩を伴う資本形成が絶えず行われている進歩しつつある社会においては、次のような法則が成立するという。

各収入の価格に対する各資本の価格の比率、すなわち各収入率（地代率、賃金率、利子率）は傾向的に低下する。しかし、各収入の社会的総和（総地代、総賃金、総利子）はそれぞれに増大する。したがって、社会全体の総収入（地代、賃金、利子の社会的総和）も増大する。名目的な国民総所得は増大する。

(I-5) 産業または生産—変形する生産と増加させる生産—

「社会的富」には自然素材のように「間接的効用」しか持たない「もの」が多い。

この第1の不便を克服するために「間接的効用」を「直接的効用」に変化させる「変形する生産」が行われる。例えば、山林の原木→製材所の木材→木工所の机、椅子

また「社会的富」には「稀少性」という第2の本質的な不便がある。この不便を克服するために「社会的富」の数量を増大させる「増加させる生産」が行われる。

投入される生産的諸用役が所与で技術進歩もなく「変形する生産」のみが行われる場合、この生産は「交換の理論」によって説明することができる。この場合の「生産」は、生産的諸用役が生産物に変換される「交換」と見ることができるからである。そして、商品交換において等価物同士が交換されるように、競争的市場経済における「生産」においても、生産的諸用役と生産物の間の等価交換が行われる。すなわち、生産物価格＝生産的諸用役の価格＝地代＋賃金＋利子

の等式が成り立つ。不等式が成立するならば「利益」又は「損失」が発生し、「企業者」間の自由競争によって生産量が自由に調整されるからである。

流通過程における単純な商品交換が「社会的富」の総価値を増加も減少もさせない本質的に不毛で、不生産的な活動であるように、「変形する生産」も「増加させる生産」を伴わない場合は、「社会的富」の総価値を増加も減少もさせない不生産的な活動にとどまる。

「社会的富」の数量と総価値をともに増大させる方法が「増加させる生産」に他ならない。その方法には2つある。

第1の方法は、収入の現在消費への支出を節約して「貯蓄」し、これを新資本財の生産に投資するという方法である。すなわち、収入を資本化するという方法である。

第2の方法は、生産技術を絶えず進歩させ、「同一の資本からより多大な収入を引き出すこと、あるいは同じことだが、より少ない資本から同一の収入を引き出すことである。」すなわち、技術革新によって資本の生産性を可能な限り高め、「社会的富」の数量を「増加させる生産」を行うことである。このとき、個々の「社会的富」の交換価値は低下しても、「社会的富」の総量が交換価値の低下率を上回る率で増加するので、「社会的富」の総価値は増大していく。市場均衡のメカニズム（生産物価格＝総収入）によって、この増大する「社会的富」の総価値は、先の社会的総収入の絶えざる増大と均衡し続けるのである。

このような技術進歩を伴う「増加させる生産」こそ、「真の生産」であり、産業の「最高目標」である。

価値尺度財としての貴金属の価値が一定期間安定的と仮定すれば、個々の「社会的富」の価格は低下し、「社会的富」の総生産量は増大するので、「安価と豊富」が実現する。

「あらゆるものが安価なのは富と文明の進歩の徴しであり、このことは、可能な限り最大多数の人びとに余裕と安楽を保証する裏づけとなる。」

II レオン・ワルラスは父親の経済思想をどのように受け継いだか

(II-1) レオンは父親の経済思想—「経済学の基本原理解」—の枠組みを継承した

レオンが父親の経済思想の枠組みを継承したことは、彼の経済学体系のうち科学としての経済学の樹立を目指した『純粋経済学要論』初版（1874-77）の以下のような「目次」を一瞥するだけで十分であろう。

- 第1編 経済学と社会経済学の目的および区分
- 第2編 交換の数学的理論
- 第3編 価値尺度と貨幣
- 第4編 富の生産と消費の自然的理論
- 第5編 経済的進歩の条件と結果
- 第6編 社会の様々な経済組織の自然必然的作用

第1編は、有用ではあるが量に制限のある「社会的富」が「交換」と「生産」と「所有」の対象となり、その研究は「科学」、「技術」、「道徳」の問題として、それぞれ「純粋経済学」、「応用

経済学]、「社会経済学」として行われることを論じている。

第2編は、レオンの経済学説の核心部分をなしており、2商品相互間の交換理論とその発展として多数商品相互間の交換理論を展開している。ここでは、父親が提唱した「稀少性」概念を「交換の後に満足された最後の欲望の強度」として捉え直し、「価格は2商品間の稀少性の比に等しい」、あるいは、価格と区別された「交換価値は稀少性に比例する」という命題を「主張」ではなく「証明」している。

第3編は、ズバリ、父親の行った貴金属のもつ2つの機能—価値尺度機能と貨幣機能—に関する議論に対応する。

第4編は、「社会的富」を耐久性の程度により「資本」と「収入」に分類し、「生産」を生産的諸用役の生産物への「変形」または「交換」として捉える父親の立場を継承し、父親のいう生産的諸用役が所与で技術進歩がなく「変形する生産」のみが行われる場合を「交換と生産の一般均衡」として論じている。生産は交換理論に包摂される。

ここでレオンは、父親による「社会的富」の「資本」と「収入」への分類を更に発展させて、「生産機構」を次のように捉えている。すなわち、①「企業者」による「生産的用役市場」における諸資本家（地主、労働者、資本家）からの「間接的効用」しかもたない生産的諸用役の「賃借」と、②これらの生産物への「変形」、ならびに、③「生産物市場」における諸資本家への「直接的効用」をもつ生産物の「販売」という「生産機構」である。

生産を担う「企業者」に対して、消費者としての諸資本家（地主、労働者、資本家）は自己の所有する資本から直接・間接に得られることになる総効用を最大化するように、価格の需給調整作用に媒介されて、生産的用役の供給量と生産物の需要量を決める。

第5編は、父親のいう「社会的富」の総量と総価値をともに増大させる「増加する生産」のうち、技術進歩は行われないが収入が資本化されて経済が成長する第1の場合（レオンはこの場合を「経済的進歩」と呼び、技術進歩を伴う資本形成による経済成長の場合を「技術的進歩」と呼んで、区別している。）を、次の2つの場合に分けて論じている。すなわち、

- 1) 消費財と並んで、収入の消費超過額（貯蓄）により新資本財が生産されるが、まだ再生産過程へ投下されず、人口や生産量の増大が始まっていない段階を「交換と生産の一般均衡」の単なる拡張である「資本形成と信用の方程式」として論じている。
- 2) 技術進歩は行われないが、人口が増大し、新資本財が再生産過程へ投下され、「社会的富」の総生産量が増大していく経済成長の段階を、「生産量の増大」、「発展する社会における価格の変化の法則」として論じている。ただし、この部分は数理的分析による「証明」ではなく、簡単な数値例による直観的な見通しを「主張」しているに過ぎない。またレオンは、父親が「真の生産」、産業の「最高目標」と考えた技術進歩を伴う資本形成による経済成長（レオンのいう「技術的進歩」）については、終生、なにも理論的研究を試みなかった。

第6編は、独占や租税などについて論じている。

以上のように、レオンは父親の経済思想を大枠において継承しているのである。

（Ⅱ—2）レオンは父親の経済思想をどの点において超えたか

1] レオン・ワルラスが父親の経済思想を超えて独自に成し遂げた理論的貢献とは何か。

それは端的に言って、2商品相互間の交換の数学的理論を構築し、これを「交換の数学的理論の原理」として据え、i) 多数商品相互間の交換の理論、ii) 消費財ならびにiii) 新資本財の「生産」（「変形する生産」）を包摂する多数商品および多数生産的諸用役の「交換」の理論にまで拡大して適用したことであると言えよう。

2] 2商品相互間の交換の数学的理論において、レオンは（1）父親が量として測定不可能とした「効用」を、物理学における「質量」のように理論上測定可能なものとして想定し、（2）「効用方程式あるいは欲望方程式」を定式化して、（3）アントワーヌ・ポール・ピカールの援助によって総効用の最大化の必要条件から個別的需要関数を導出した。

すなわち、商品交換者たちの個別的需要関数は、したがってまた個別的供給関数も同様に、彼らの商品に対する主観的な「効用」と客観的な商品の「所有量」という2つの要素を前提に、市場における2商品相互の交換比率としての価格を交換の与件として、効用を最大化する彼らの行為から、すべての価格の関数として導出されることを「証明」した。

そして、個別的需給関数の集計による市場需給関数の導出と市場における需給の一致から均衡価格と均衡数量が理論的に決定される。さらに、この均衡解が現実の市場においても交換の自由競争制度により経験的に成立することが論証される。

こうして、父親には到達することができなかった、不可視の「交換価値」の比である「価格」は「稀少性」の比に等しく、「交換価値」は「稀少性」に比例するという「命題」が科学的に「証明」されたのである。

3] 多数商品相互間の交換においては、間接的交換（「裁定」）が行われる可能性があることから、ここに初めて「価値尺度財」の導入が説明される。また、消費財と新資本財の「生産」も生産的諸用役の生産物への「変形する生産」に過ぎず、交換と生産の均衡において、生産物の価格＝生産的諸用役の価格＝生産費が成立するので、財の生産理論は結局「交換の理論」に包摂されてしまうことが「生産方程式」、「資本形成と信用の方程式」として示される。これら一連の理論もまた、すべて父親の経済学的認識を超えるものであった。

III ワルラス父子の経済思想とフランス民法典

父親の経済思想を支える「稀少性」と「耐久性」の概念は、ともに古代ローマ法を継受するフランス民法典における「物」や「権利」の分類基準に対応物を求めることができる。

息子のレオンはさらに、商品交換者たちの効用最大化をすべて満たす市場均衡における価格の決定のうちに、「社会的富」の所有者による「所有権」の3権能、「使用・収益・処分」の最大限の行使が実現されていることを読み取っていると、報告者は考える。